



欲情したら何処でも誰とでも

中年おっさんの上で喜んで腰を振る

援交島

ムチムチ女の子にズプズプと...

～気に入った女の子とSEX三昧～

『。。。援交島？』

『そう、お金さえ払えばいつでも何処でも誰とでも出来る島さ。ここに行けば君の女を好きなだけ抱きたいって願いも叶えられるさ』

。。。不気味な女だった。

何かに誘われるかのように入った薄気味悪い店。

店のカウンターにたたずんでいた女は見透かすような目で俺に話しかけてきた。

君の欲しいモノを売ってあげようと。

俺の返事も聞かず女は懐から何も書いていない白紙のチケットをヒラヒラとさせて俺に見せた。



「ただし、島に入ってから一週間後の定期船で帰らなくちゃダメだよ。もし乗り遅れて帰れなかったら島の住人になっちゃうからね」

女は訳の分からないことを言っていたが俺の耳には入ってこなかった。

俺は魅入られるようにチケットを見つめていた。



あの女から買ったチケツトで俺は今、援交島に来ていた。

半信半疑ながらも近くにいた可愛い娘に声をかけるが
信じられないことに少し誘っただけで自分のような
おっさんに喜んでついて来る。

タダ同然の値段で俺の上で腰を振る少女。

名前も知らない男の上で快楽を貪るかのように必死に
腰を振る彼女の姿に耐え難い興奮を覚えひたすらに腰
を突き上げる。

ん
あ

ヌプッ

ヌプッ



「あつ、いい、いい♪いいよっ♪おじさんのおちんちん、激しいよっ♪私の子宮、下からコンコンって突いてるの♪」

「まったく、知らないおじさんの上で喘いじゃうなんてエッチな娘だな。そんなにチンコが好きなのかい♪」

「だっておじさんのおちんちん硬くて気持ちいいんだもん。女の子ならみんな好きになっちゃうよ♡」

どろんとした目で俺を見る彼女は恍惚に満ちた表情を浮かべていた。



「ジュポッ」

「ジュポッ」

風俗やソープに行ってもここまで受け入れてくれる娘はいなかった。

はぁ♡
…孕ませたい。

は♡

俺のチンコを喜んで受け入れてくれているこの少女を自分の精液で孕ませてやりたい。
ムクムクと気持ち膨らみ、狙いを定めるかのように子宮にチンコをぐりぐりと擦り付ける。

ひう♡

ジュポッ

ジュポッ



「中につ！子宮に直接出すからなっ！」

「いいですよ♡中に出して♡この島に来た男の人は、
女の子に好きなかだけ中出ししていいんですからね♪」

嬉しそうに微笑む彼女の顔に我慢出来なくなり、
孕め孕めといいながら腰を押し付けた。

あ♡♡

ん♡♡
あ♡♡

ジュポッ

ジュポッ



「あはっ♥お腹の中あ…熱い…♥
子宮の一番奥でびしゃびしゃって精液が叩いてるっ♥」

嬉しそうに子宮のあたりをさする彼女の顔を見て
出したばかりのチンコが再びムクムクと硬くなる。

「おじさんのおちんちんまだガチガチだあ♥こんなに
凄いなら、この女の子達にモテモテになりますよ♥」

ん♥
あ♥

どぽっ♥
どぽっ♥



どうやらこの島に男というのはかなり少ないらしい。

現に俺も他の男とは会っておらず、この島の学校に
いたっては女の子しかいない。

学校の空き教室で少女たちにチンコを舐めさせながら
そんな事を考える。



他の子たちが授業を受けているというのにこの子達は必死に俺のチンコを舐めている。

まるで雛鳥が餌を奪い合うかのようにチロチロと舐めまわす舌にビクビクとチンコが震える。

もし自分に娘がいたらこのぐらいの歳だろう。

そんな少女たちにチンコを舐めまわされているという背徳感に言い知れぬ興奮を覚える。

れろっ

ちゅぱ

ちゅ





「ん……ちゅぷ……れる……。
ん……美味しい♡おじさんのおちんちん恥ずかしい
味がする……」

「んっ、くちゅっ、れる……。♡ほんとだぁ♡
おじさんのおちんちん臭くて美味しい♡」

れろっ

ちゅぱ

ちゅ

「こんなちっちゃい子におちんちん舐められて興奮するなんて変態なんだ」

「はっ、ちゅっ、むちゅ……はあ、ぺるっ、ちゅぶ……♡
あはっ♡ぴくぴくしてる。ちゅちゅいお口でぺるぺる
されて我慢できないんだ」おじさんの変態♡

れろっ

ぺろっ

ちゅぽ

ちゅ







「ん。。。ちゆる、ごきゅ。。。ん。。。♡
おじさんの精液臭くて美味しい♡」

「ああっ、いいな。私もおじさんの精液欲しい」

「ん、ちゆるっ、じゆるっ♡おじさんのおちんちん
元気だもん、まだまだできるよね」

ちゅぱぱ

ちゅ

びく
びく

びゅるっ♡

「おいおい、こんなおっさんのチンコで突かれて
そんなによがるなんてエッチな娘だな」

トロトロの膣壁は離さないとばかりにチンコを
締め付ける。

数時間前に会った男のチンコをこうも欲している
なんて、この島の女は誰も彼もドスケベらしい。

「ユフッ」

「ユホッ」

はぁ
はぁ
はぁ

ん
あ





「だ、だってえ♥おじさんのおちんちん気持ちいいから。私がエッチなんじゃないもん♥」

「おまんこヒクヒクさせながらそんな事言っても説得力ないぞ。今だって俺のチンコ締め付けて離さないじゃないか」

「ユッポッ」

「ユッポッ」

はぁ
はぁ
はぁ

ひゅっ♥

ん♥
あ♥



「ち、ちがうもん。おじさんのおちんちんがいい
からなんだもん」

「そんな事言っでチンコならなんでもいいんじゃ
ないのか。最初からマンコぐしょぐしょに濡らして
いたしな」

「ユポッ」

「ユフッ」

はぁ
はぁ
はぁ

ひゅっ

ん
あ



「そ、それはあ……。お、おじさんのがき、気持ちいいからでえ……」

「そっか、そっか♪それなら中出ししてもいいよな。赤ちゃんが出来ちゃうくらい子宮にドピュドピュッて出しちゃってもいいよな♪」

「ユッポッ」

「ユッポッ」

「はぁ
はぁ」

「ひゅっ」

「ん
あ」



「それに子宮も精液が欲しいって吸いだそうとして
いる」

「うん」いよいよ出して♡おじさんの精液で赤ちゃん
つくって♡」

「ユッ
ッ」

「ユッ
ッ」

はぁ♡
はぁ♡

ひゅ♡

ん♡
あ♡



「ついいいいいいい♡ひいつ♡ひうつ♡でりゅつ♡
んああああああ♡♡精液でてりゅのお♡♡♡」

どろっ♡
どろっ♡

はあ♡
はあ♡

ひゅ♡

ん♡
あ♡

「ふふ、おっぱい気持ちいい？おじさんのおちんちん
私のおっぱいの中でビクビクっしてしてるよ」

「ああ、おっぱいむにむにして気持ちいいよ」



「んちゅっ…れろっ♡おじさんのおちんちん臭くて
美味しい…♪」

「胸だけじゃなくて口でも啜えてくれ」

はぁ♡
はぁ♡

ぺろっ

れろっ





「んっ♡ちゅっ♡ちゅる♡...♡じゅるるっ♡」

ちゅ

ちゅ

ちゅ

『...んちゅ...れろ、あむ♡...うう?』
これでいいの...?』

『そうそう、うまいぞ』



「んっ♡おちんちん、お口の中でビクビクつて
してる♡いいよ♪おじさんの精液、私の口に
ビュッビュッって出して♡」

「んっ！出すぞ！全部飲んでっ！」

「んっ、んぐっ♡んんっ……♡……おじさんの
精液すっごい濃い♡」

びく
びく
ちゅ
ちゅ
びゅ
びゅ
♡



『うおおおおっ！人妻まんこ気持ちいいっ！』

まさか本当に子持ちの人妻とまでセックスできる
なんて思ってもみなかった。

いくら援交島といっても、はした金でここまで好き
放題できるとは。

ズンポッ

ズンポッ

はあ

はー

んあ

あ

あ



「待って！まってえ……！ちんこ押し付けないでえ♥」

「なんか変へんなのお……っ♥子宮が降りて来ちやう
精液が欲しいって降りて来ちやうのお♥」

パッ

パッ
パッ

「欲しいんだろ、いいぞ子宮の奥まで満タンにして
やる。そのかわり俺の子供を孕むんだぞ」

はあ♥

はー♥

ん♥
あ♥

あ♥

あ♥



「はいっ♥孕みますっ♥孕みますからあ♥
だから貴方の精液出してっ♥中でいっぱいびゅー
っでしてえ♥」

「っ! ああ、出すぞっ! 中に出すからなっ!」

パン

はあ♥

はー♥

あ♥

ん♥

あ♥

あ♥



「あっ♡あっ♡ああんっ♡いっぱい出てるっ♡
できちゃうっ♡赤ちゃんできちゃうっ♡」

「ふう、出した出した。チンコべとべとになっち
まったな」

びゅんっ♡

どぶっ♡どぶっ♡

はあ♡

はー♡

ん♡あ♡

あ♡あ♡

びく

びく

「……んっ♡……じゅぶ♡おじさんのおちんちん
お母さんの味がして美味しい♡」

「……じゅぶっ♡……じゅるるっ♡……えへ♡粘っ
こい精液尿道まで残ってるよ♡」

はあ♡

はー♡

「じゅぽっ」

「じゅぽっ」



「まったく、親子揃ってエッチだな。チンコを吸い
付いて離さない」

「ぢゅるる♥…ぢゅぶっ♥だっっておじさんの精液
美味しいんだもん♥」

はあ♥

はー♥

ジュポッ

ジュポッ



「お母さんにいっぱい出したのにまだビキビキしてる♡おじさん私のお口で興奮しちゃってるんだ」

「いいよ♪おじさんの精液ごっくんしてあげるから好きなだけ出して」

はぁ♡

は♡

ジュポッ

ジュポッ



「んんぐゅ♡…♡じゅぶっ♡…♡じゅるるっ♡」

「おおおおおっ♪吸い取られるっ!」

「じゅぶっ♡…♡じゅるるっ♡んんぐうっ♡」

「…っ!出すぞっ!全部飲めっ!」

はあ♡

は♡

どろろ♡♡

ちゅぱ

ちゅ



「……んっ♡……んぐっ♡ぷはっ♡どう、気持ちよ
かったおじさん♡」

「ふう……ああ、ありがとう気持ちよかったぞ」



島に着いてから五日目。俺の方から誘わなくても
逆に誘われるようになっていた。

誘ってくる娘は全員可愛いからこっちとしては
問題などないのだが。

自分の方からタダ同然の値段で良いから抱いてくれ
などと、どういう事なのだろうか。

気になった俺は誘ってきた娘に事情を聞いてみる
事にした。

はあ



はー



スリ



スリ



「…え？おじさんの事なら噂で島中に響いていますよ
すっごいおちんちんを持っているおじさんが来てるん
だって♪」

どうやら今まで抱いた娘たちが噂し、それが広まって
現在に至るらしい。



「んっ♡他にもおっぱいが好きだとか後ろから動物
みたいにズンズン突くのが好きだって聞いていますよ」

気づいたら性癖が周りにバレているなんて。
恥ずかしいのを隠すようにひたすらに腰を振る。





「あはっ♡おっぱいの中でびくびくしてるの分かりますよ♡いいですよ、私のおっぱいにビュッビュッって射精してください」

「……!」

あっ♡

あ♡

はあ♡

はー♡

ひゅ♡

スリ♡

スリ♡



「…あっ♥…でてる…♥あったかあい精液おっぱい
の中でいっぱいビュクビュクって出てるっ♥」

「ひうーっ！そこ、そこだめえ♡ズブズブって
挟っちゃダメえっ♡」

「そんなこと言っただってチンコが欲しいって絡み付
いて離さないぞ」

「ひうっ♡だって気持ちいいの止まらないのお♡」

はぁ♡

はー♡

あ♡

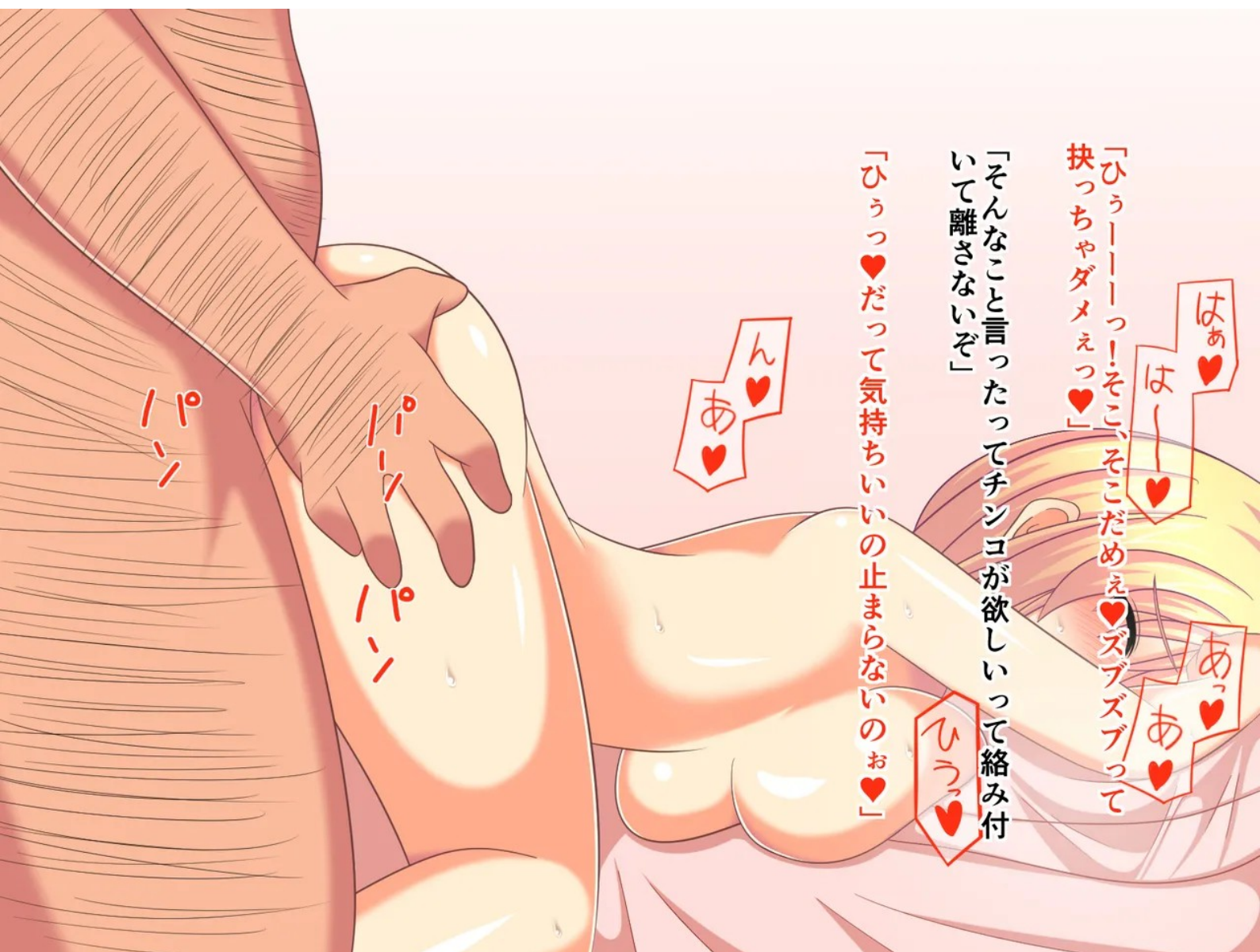
あ♡

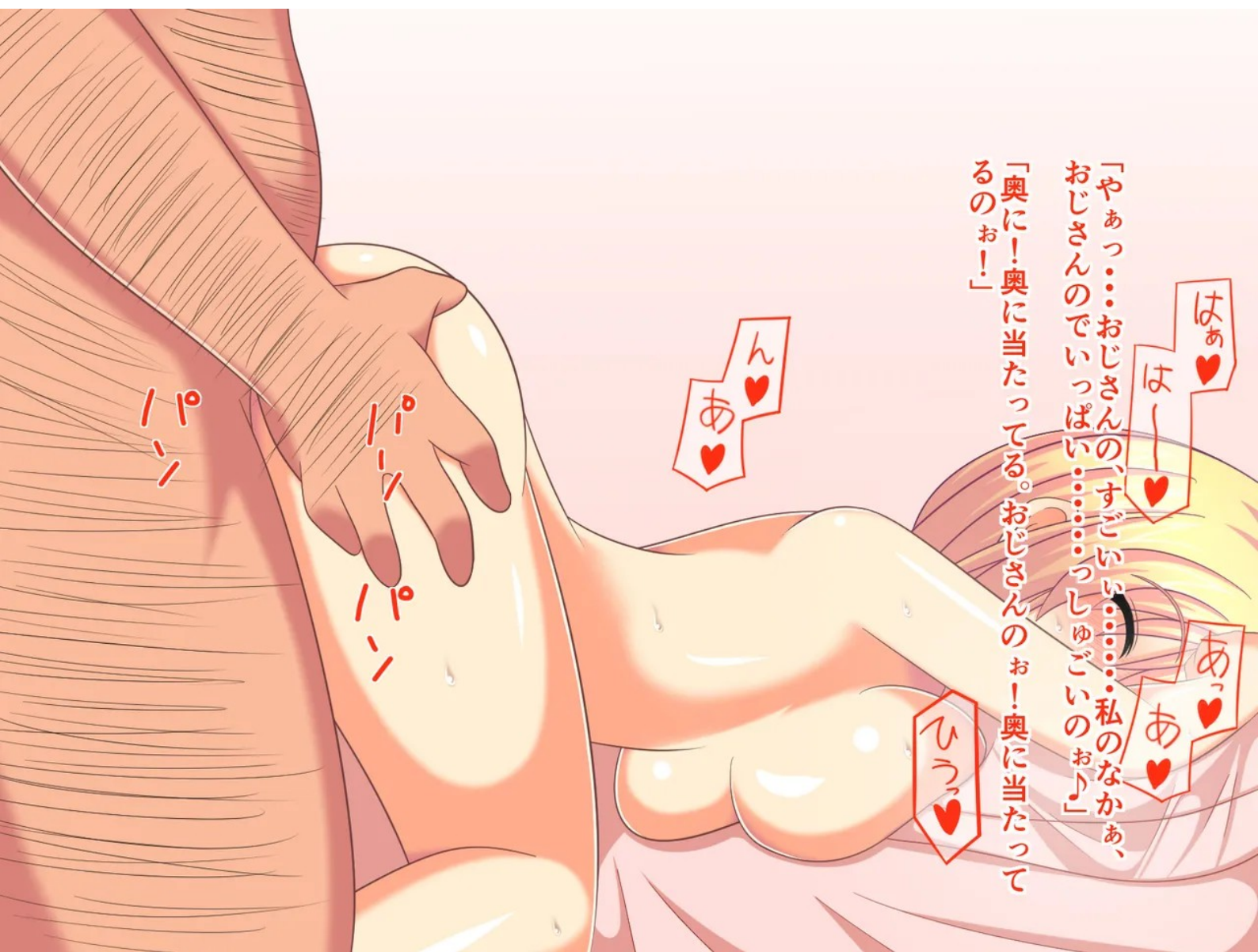
ん♡
あ♡

ひうっ♡

パッ

パッ
パッ
パッ





「やあっ……おじさんの、すごい……私のなかあ、おじさんのでいっばい……っしゅごいのお♪」
「奥に！奥に当たってる。おじさんのお！奥に当たってるのお！」

はぁ♡

はー♡

あ♡

あ♡

ひう♡

ん♡
あ♡

「おじさんのおちんちん、私の子宮にっ、赤ちゃん
作るところ、ノックしてるぅっ」

俺の動きに合わせて彼女は腰を弾ませ自分の快楽
を貪っている。

「おじさんの太くて、熱くてえ♪ゴツゴツしたのが
きてるのお！」

「そんなにいいならもっと気持ちよくしてやるからな」

はぁ♡

はー♡

あっ♡

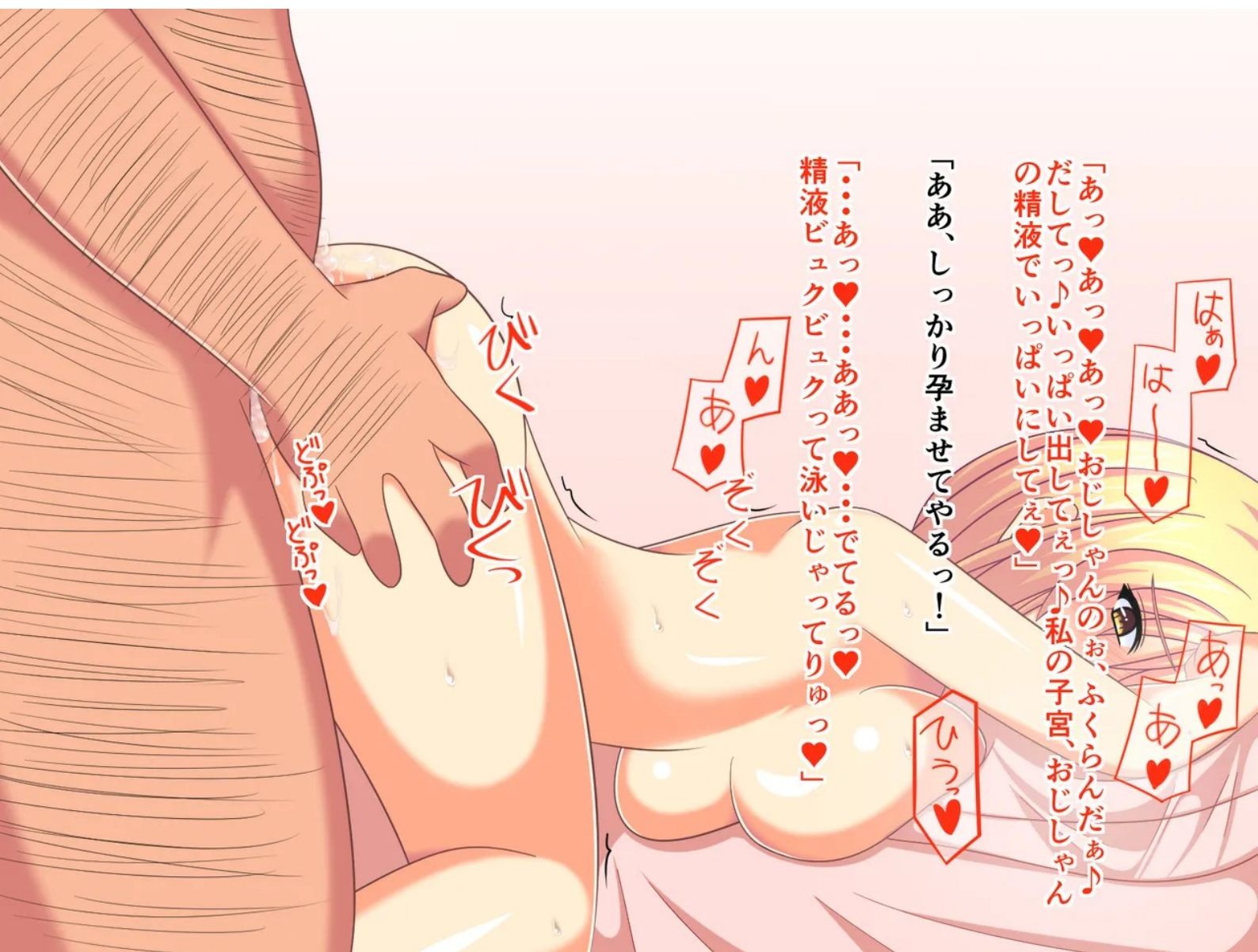
あ♡

ひう♡

パッ

パッ

パッ



「あっ♡あっ♡あっ♡おじしちゃんのお、ふくらんだあ♪
だしてっ♪いっぱい出してえっ♪私の子宮、おじしちゃん
の精液でいっぱいにしてえ♡」

「ああ、しっかり孕ませてやるっ！」

「…あっ♡…ああっ♡…でてるっ♡
精液ビュクビュクって泳いじゃってりゅっ♡」

ん♡
あ♡ぞくぞく

ひゅっ♡

はあ♡
はー♡

あっ♡
あ♡

びく
びく

どろっ♡
どろっ♡

「あんっ♡動物みたいにならされてるの好きい♪
おじさんのゴツゴツおっきいおちんちん私のこと、
犯してるよお♪」

俺は学校帰りの学生をホテルへ連れ込みひたすらに
犯すように抱く。

「ジュポッ」

「ジュポッ」

はぁ♡

はぁ♡

ん♡

あ♡

あ♡

あ♡





「なかありまたでてりゅ♥おちんちんじゅぽじゅぽ
動いてりゅ♡出しながら動いてりゅの♡」

「熱いのお♪おじさんのおちんちんいっぱい熱いのお♪」

「ジュポッ」

「ジュポッ」

はぁ♥

はぁ♥

ん♥

あ♥

あ♥

あ♥



すでに何度も出しているのに射精は止まらずひたすらに求めるように腰を振る。

「また出すぞっ!」

「うんっ♡だしてっ♡おじさんのドロドロ精子で子宮満たしてえ♡」

「ジュポッ」

はぁ♡

はー♡

ん♡

あ♡

あ♡

あ♡



「あはっ♥またあり出てるう♪ビュクビュク子宮の中泳いでるっ♥やあっ♥あんっ♥んっ♪いいよお♪おじさんの、すごいのぎてるう♥」

「ひうっ♥おちんちんいっぱい出したのにまだ硬い♪こんなになれたらおじさんの女になれちゃうよ♥」

どぽっ♥
どぽっ♥

びく
びく

はあ♥
はー♥
ん♥
あ♥

あ♥
あ♥

ぞく
ぞく

「オマンコびちゃびちゃ濡れてヒクヒクしてるぞ、
そんなに入れて欲しいのか？」

「んあんっ、や、やあつ、早く入れてえ♡舐めるだけ
じゃいやなの♡ウズウズして止まらないの♡
もう入れてえ♡」

「しようがない、そんなに入れて欲しいのなら入れて
やるか」

ワチャ
ワチュ

ひゅ♡

あ♡
あ♡

はあ♡
は♡





「す、ごお……中に入ってるのわかるよお♡
……おじさんチンコおつきくて、くるしい♡」

「まったくこんなやりたがるとはホントエッチ
だな♪」



「だ、だってえ……♡おじさんのチンコゴツゴツ
硬くて気持ちいい所に当たるんだもん♡」

「こんなの知っちゃったら、止まらないよぉ♡」

ひゅ♡

あ♡
あ♡

はぁ♡
は♡

ジュポッ

ジュポッ

「あんっ♪んあ♪へん♪へんらよお♪こんなっ♪
気持ちいいの、へん♪おかしくなっちゃうよ♥」

「まったく仕方ないな、それじゃあ出してあげるぞ。
…って聞こえてないかな」

「あ、あは♥でてりゅ♥おじさんの精子でてりゅのお♥」

はあ♥

はっ♥

ひゅ♥

あ♥

あ♥

ぞくぞく

どろろ♥
どろろ♥
どろろ♥





あの女から言われた一週間、今日が最終日。
帰らなくてはいけないと分かっているのだが、
それでもこの島から出たくないという思いが
足を鈍らせ、女を抱かせる。

それによく考えれば島の住人になるということは、
ここで好きなだけ女を抱き続けることが出来ると
いうことだ。何も悪いことはないじゃないか。

「・・・おじさん考え事？腰止まっちゃってるよ」

「おおっ、悪い、悪い。ちゃんと気持ちよくしてあげないとな」

膣壁を抉るように止めていた腰を突き上げる。

自分の上で喘ぐ女の声を聞きながら先ほどの考えをとりあえず思考の端に置く。



「ひうつ♡やっぱりおじさんのチンコ気持ちいい♡
ずぶずぶ出たり入ったり気持ちいいよ♡」

女の悲鳴のような喘ぎ声を聞きながら、必死にヌプッ
抽送を繰り返す。

…余計な事を忘れるように。

ヌプッ





「あっ♪あん♪おじさあん♪はやいっ♪はやいよぉ♪
こんなにされたらわたしっ、もうダメえっ！すごいっ、
すごいのきてえっ！」

ヌプッ

ヌプッ

はぁ



はー



あっ



あ



びく

びく

えく

えく

ん



あ



ひう



急激な締め付けとともに女の膣に精を吐き出す。

「あ……あ、あ♥なかあつい♥おじさんの精子
ビュクビュク泳いでるう♥」

どぽっ♥
どぽっ♥

……やっぱり手放す事なんて出来ない。

……俺はこの快楽を手放したくない。



最終日を過ぎて数日たった。

だが、あれから何の音沙汰もない。

やはり住民になるというのはここで一生過ごしていけるという事なのだろう。

俺はほくそ笑みながら叩きつけるように腰を振る。

これから好きだけ女を抱けると思うとイチモツがさらに硬くなる。





「あは♪おじさんのカチカチちんこズブズブって
オマンコ挟ってりゅ♪熱くて、硬くて、ぶっといよお♪」

「ひうつ♪す、すごいよお♪さっきよりすごい♥
ああっ♪これ、すごっ♪すごい♪後ろからあ♪
おじさんのがずんずんつけてきてるう♥」

はあ♥

はー♥

ん♥

あ♥

あ♥

あ♥



「おっきいのがきてるの、あたしの中、わかるよお」

「あつ、また、すごいのがきてる、イクッ！イクのお、おじさん、きてきてきてえ♡」

はあ♡

はー♡

ん♡

あ♡

あ♡

あ♡

「あはっ♥私の中、子宮の奥までいっぱい精子あふれてりゅ♥」

全てを吐き出すかのように精子を子宮に叩き付けた。

……だが射精すると同時にだんだんと意識が遠くなる。

どろろ♥
どろろ♥

ぞく
ぞく

はあ♥
はー♥

ん♥
あ♥

あ♥
あ♥

びく
びく



「……んっ？私どうしたんだっけ……」

……あれ？なんで女のような言葉遣いになってるんだろう。

ぼやけていた視界が少しづつはつきりとしてくると同時に自分の体に違和感を感じる。

はぁ
はぁ



「・・・えっ！なんだよこれ!？」

自分の視界に映る半裸の少女。これが俺の体なのか！
俺が目覚めたのに気づいたのか鼻息の荒い男が
こちらに近づいてきた。

はあ
はあ
はあ



「ひっ♥なんだよお前……。こっちくんな！」

「ん？どうしたんだいいきなり。
……。ああ！そうか、そういう設定なんだね」

はあ♥
はー♥
体にたいした力はいらず逃げようにも逃げれない。



「ひぐっ、入れるなあ！入れるなあ！」

「はは、そんな事言ってもオマンコもうぐちやぐちやじゃないか。ここが良いんだろう♪」

「ひぐっ♥ま、まって♥突かないでえ♥子宮コツコツしないでえ♥」

「突きされるたびに自分の中の男が消えていくのを感じる。」

ぞくぞく

ひうっ♥

あ♥♥あ♥♥

ヌプッ

ヌプッ



「いやぁ♥いやなのに気持ちいい………♥
気持ちいいのがとまらないよぉ♥」

体が女を受け入れ自分を作り変えられるような感覚が
する。





「や、やめっ！ダメえ♥おかしくなっちゃう♥」

「出すぞっ！しっかり受け止めろよっ！」

はあ♥

はー♥

ん♥
あ♥

ぞく
ぞく

あ♥
あ♥

ひう♥

ヌプッ

ヌプッ



「うおおおっ！搾り取られるっ！」

「あっ♥ああっ♥でてりゅ♥精子が子宮にでてりゅ♥
あはっ♥なっちゃたあ♥女の子になっちゃたよお♥」

はあ♥
はー♥

ん♥
あ♥

ひく
びく

ひゅ♥

あ♥
あ♥

ぞく
ぞく

どろ♥
どろ♥

・・・数週間後

いつかの私のようにおどおどと周りをうかがっているおじさんに声をかける。

「おじさん私と良いことしない♡」

「えっと、あの・・・」

「いいんだよ恥ずかしがらないで。この島の人はみんなエッチが好きなんだもん」

そう、女になってしまふほどに・・・。



あれから私は完全に女となった。

この島の住人になるという事は女としてこの島で
生きるという事だった。

だけど私は何も後悔してなどいない。

だって、女になって男に抱かれるのがこんなに幸せ
なんだから。

END













































































